

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 12 月 3 日現在

機関番号：31603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884055

研究課題名(和文) 磐城平城主内藤義概の和歌文芸について

研究課題名(英文) A study of Waka poetry of Yoshimune NAITO (the lord of Iwakitaira-jo Castle).

## 研究代表者

松本 麻子 (MATSUMOTO, Asako)

いわき明星大学・人文学部・准教授

研究者番号：70708990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：磐城平(福島県いわき市平)城主、内藤義概(元和元年 1619～貞享2年 1685)の和歌について研究を行った。内藤義概が残した和歌資料の全体像の把握をし、家集『左京大夫家集』、義概が主催した歌合『二十番歌合』、『十五番歌合』の書誌調査、これらの資料の翻刻を行った。また、義概と親交のあった近世初期の大名歌人と堂上歌壇との関わりなども調査した。義概の和歌や俳諧には、磐城国の地名や水戸街道の土地の名が多く詠み込まれており、その土地を新しい名所として「歌枕」に仕立てたことも明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I have studied Waka poetry of Yoshimune NAITO (the lord of Iwakitaira-jo Castle, 1619～1685). I took pictures and investigated bibliographies of his anthologies of Waka poems. I have examined the trends of his contemporaries too. As a result, it has been cleared that Yoshimune was famous not only as a Haikai poet, but also Waka in those days. In addition, we can find a lot of Meisyo (noted places) around Iwaki or Mito-kaido in his Waka and Haikai poetry.

研究分野：日本文学

キーワード：和歌 内藤義概 武家歌人 名所 磐城 歌枕 俳諧

## 1. 研究開始当初の背景

磐城平城主内藤義概の俳諧活動については、多くの研究がなされている。義概が延宝2年(1674)松山玖也に命じて編纂させた俳諧撰集『桜川』は重要な古俳諧資料と位置づけられ、1960年には既に活字化された。続けて1972年には『いわき市史』第九巻近世資料で風虎の全句作が掲載され、『いわき史料集成』(1992年)では『百番俳諧発句合』が翻刻されている。また、内藤風虎については、岡田利兵衛「内藤風虎」(『国語と国文学』第396号、1957年)をはじめ、壇上正孝「風虎内藤義概の生涯と文業」(『広島大学学校教育学部紀要』第2第6巻、2000年)、大村明子「風虎と露沾 - 父子の確執 - 」(『近世文芸研究と評論』第46号、1994年)など、幾つもの論考が発表されている。

一方、俳諧以前から行っていた義概の和歌活動に関しては、加藤定彦「内藤風虎伝拾遺 - 父子の確執と歌歴を中心に - 」(『立教大学日本文学』第85号、2001年)に言及があるに過ぎない。和歌資料に関しても、義概の家集『左京大夫家集』(国立公文書館内閣文庫)や肥後国宇土藩主細川行孝亭での歌合『二十番歌合』・義概主催、延宝四年(1676)の『十五番歌合』(ともに国立公文書館内閣文庫)、義概の命を受け、葛山為得が編纂したという『続類題和歌集』(有吉保氏蔵)、いわき市にある飯野八幡宮に奉納された「飯野八幡宮遷座奉納五十首和歌」(国指定重要文化財)などが確認できるが、これらは未だに翻刻さえなされていない。

義概は、烏丸光広を歌道の師とする他、後水尾天皇・道晃法親王・烏丸資慶・中村通村・飛鳥井雅章・日野弘資ら近世を代表とする歌人たちと交流を持っている。また、加藤定彦氏の指摘にあるように、義概は水戸光圀を中心とした水戸家文化圏でも活動していたようで、水戸家関係者の文芸が筆録されている『文苑雑纂』や、水戸家歌人山本通春による『文翰雑編』などにも、義概や内藤家家臣たちの和歌が載せられている。つまり、義概の和歌活動は近世の歌壇史の上で極めて重要であり、義概の和歌を精査することにより、地方の大名が文芸の面で互いに交流した「場」がより具体的に判明すると考えられる。加えて、地方大名が中央歌壇とどのように関わったかを調査することは、近世和歌を研究する上で意味のあることだと思われる。

## 2. 研究の目的

本研究は、「磐城平城主内藤義概の和歌文芸について」と題して、磐城平(福島県いわき市平)城主、内藤義概(元和元年 1619 ~ 貞享2年 1685)の和歌について研究を行うことを目的とした。今までなされてこなかった義概の和歌活動を調査することは、俳諧だけではなく磐城平藩の文芸活動全般を

知る上で重要であり、これまで俳諧研究で認識されてきた、義概 = 一地方のパトロンの存在という概念を覆すものになると考えたからである。義概を中心とした磐城平藩と水戸光圀周辺の水戸藩との文芸的関わりを把握し、近世初期の地方大名が互いにどのような交流をしていたのかを示す具体例を提示することも本研究の目的とする。

また、義概を指導した烏丸光広や後水尾天皇、日野弘資ら中央の歌人との関わりを、家集『左京大夫家集』や『二十番歌合』『十五番歌合』などの翻刻・注釈作業によって見極める。さらに、地方の大名がどのように和歌を学んでいたのか、中央歌人はどういった指導を行っていたのか、といった点を明らかにする。これらも、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究で行った研究の方法は、以下のとおりである。

(1) 内藤義概の家集『左京大夫家集』、肥後国宇土藩主細川行孝亭の歌合『二十番歌合』、義概主催、内藤家家臣らによる『十五番歌合』、「飯野八幡宮遷座奉納五十首和歌」に代表されるいわき市飯野八幡宮関係資料、久留米市立中央図書館、延岡内藤記念館蔵の義概の懐紙などの和歌資料を整理し、全体像を把握した。また、書名が同一の資料を比較し、それぞれの諸本の有無を明らかにした。

(2) (1) で閲覧可能であった資料の書誌調査と写真撮影を行った。

(3) 調査した資料をもとに翻刻を行い、大学の紀要等で許可された資料の公開を行った。

(4) 家集『左京大夫家集』や『二十番歌合』、『十五番歌合』の詞書などから、義概と関わりのあった歌人を調査した。交流があった歌人や地方大名について、義概との人間関係を整理し、まとめた。

(5) 和歌の注釈作業を行い、義概や水戸家文化圏の歌人がどのような歌風を目指していたかを明らかにした。

(6) 義概の和歌活動が、後に没頭した俳諧にどのような影響を与えたのかを検討し、まとめた。

(7) (1) ~ (6) を行うことにより、近世歌壇史の上で、内藤義概の果たした役割について明らかにした。

## 4. 研究成果

(1) 内藤義概と磐城国の名所和歌の関係について明らかにした。

奥州磐城平藩の第三代藩主である内藤義概には、没後編纂された家集『左京大夫家集』がある。また、日野弘資判の『十五番歌合』

『二十番歌合』、後水尾院の『類題和歌集』を増補し、葛山為篤に編纂させた『続類題和歌集』などがあり、和歌にも熱心であった。義概の家集『左京大夫家集』は、後水尾院をはじめ、道晃法親王・中院通村・烏丸光広・飛鳥井雅章・烏丸資慶・日野弘資・中院通茂の点を得た歌を中心にまとめられている。点者はいずれも近世初期の堂上歌壇を代表する歌人であり、義概は「正統な」和歌を学んでいたということが出来る。だが、家集『左京大夫家集』には、磐城やその周辺の土地の名を詠み込んだ和歌、つまり、これまでの和歌には詠まれたことのない新しい「名所」の歌や、他の国の名所とされているものを磐城国の「名所」と見て詠んだ歌が載せられている。

近世の大名が、領地内の土地を「名所」として和歌に詠み込もうとしたことは、何も磐城平藩だけに言えることではない。正徳二年(1712)に成立した『仙台領地名所和歌』は、五代仙台藩主伊達吉村が領内の「名所」20箇所を詠んだ歌をまとめた書であり、また同じく吉村の手によるかと推察される『仙台領内名所和歌』は、仙台藩にある45の「名所」を詠んだ360首の和歌を載せている。こういった例のように、近世以降新しい「名所」の発見は続いた。

しかし、内藤義概は貞享二年(1685)に没した近世初期の大名であり、この時期に中央の人々は誰も知らないであろう在地の「名所」を歌に詠むという行為は、和歌の歴史を確認しても前例が無い。義概の時代まで、和歌史に登場することのなかった磐城国の「名所」は、同時代の俳諧にも多く詠まれている。和歌・俳諧の区別なく新たな「名所」を詠もうと試みた義概には、どのような目論見があったのかを考察し、「磐城平城内内藤義概の文芸について」「名所」の和歌・俳諧を中心に」として、「いわき明星大学大学院人文学研究科紀要」(第12号、2014年3月)にまとめた。以下、その一部を簡単に記す。

家集『左京大夫家集』に見える「名所」の歌

岩城かしこの沼にて菖蒲を

けふとてはここもかしこの沼水にみなおりたちてあやめひくらん (30才)  
この歌にある「かしこ沼」とは、現在の福島県いわき市腎沼寺にある沼で、国内有数のウナギの群棲地として知られている。この歌には中院通茂(寛永八年 1631 ~ 宝永七年 1710)の点が付いている。この「岩城かしこの沼」は新編国歌大観・私家集大成に所収される和歌にはむろん詠まれたことはなく、奥州もしくは陸奥の名所として、歌枕書や名所集などの諸書に取り上げられたこともない。中央では知られていない「かしこの沼」を、あえて義概は「名所」として歌に詠んだのである。

秋の比、磐城弥生山にて

桜だに見えし梢も染かへて秋はやよひの山の紅葉ば

秋といへば霞も霧のやよひ山花を紅葉にそめかへしより (126ウ~127オ)

「磐城弥生山」はいわき市平鎌田にあった鎌田山のこととされ、義概が鎌田山を開発して桜の木を植え、以来ここは桜の名所となった。「弥生山」が桜の名所となったのは義概の時代であり、ごく最近自らが作った「新しい名所」を和歌に詠んでいることがわかる。このことから推測すると、義概は領内に著名な名所を発見するだけでなく、新しい「名所」を加えることで「歌枕」をさらに生み出していこうと考えていたようだ。

菅江真澄(宝暦四年 1754 ~ 文政一二年 1829)は秋田藩第九代藩主佐竹義和の命で領内を調査し、「和歌や漢詩に詠める「みやび」な名所をたくさん設けようとした」という。このことを指摘した錦仁氏は『なぜ和歌を詠むのか 菅江真澄の旅と地誌』(笠間書院、2011年)で「(秋田)藩主は和歌に詠める美しい風景や場所をたくさん設けようとした。そうすれば、わが領内は和歌の美的体系の中に価値ある位置を獲得することになる。都の人々と同じ普遍的な美意識で見ることができるようになる」と指摘する。名所の少ない磐城国にも、歌枕として古来和歌に詠まれてきた名所と似た、または思い起こさせる場所があり、それを新しい磐城国の「名所」として義概は和歌に詠み込んだと考えられるのである。

#### 「名所」の拡大と俳諧

『桜川』は延宝二年(1674)に成立した俳諧撰集で、義概(俳号は風虎・風鈴軒)が松江重頼(維舟)・北村季吟・西山宗因らに蒐集させた句を、大阪から招いた松山玖也に編纂させたものである。義概が風虎として俳諧活動を行ったのは、40代に入ってからである。『桜川』には、和歌と同様、磐城の土地が「名所」として詠み込まれている。

陸奥久乃浜と云所にて

11 久の浜の真砂の数や御代の春風鈴軒

みちのく渡戸と云所にて

1364 ぜんまいのはえ出ば石のわたど哉風鈴軒

『桜川』には、他にも「釜戸」「綱取」「走熊」などの地名が見え、これらはいずれも現在のいわき市に残る地名である。小名浜のごく近くにある「播磨作」や、沼内に近い「藤間浦」、久の浜に近い「小久」など、多くの地名を松山玖也や義概の家臣が詠んでいる。

義概や内藤家家臣、松山玖也の詠んだ『桜川』に見える地名は、平城のあった現在のいわき市のみならず福島県全体の広域にわたる。俳諧の発句の詞書にその句が詠まれた場所を記すことは、特別なことではない。だが、右に挙げた句はいずれをとっても、地名を句

に詠み込んでいる。これは、磐城国の土地を「名所」として詠もうという意図があると見てよい。

#### 江戸～磐城間の「名所」

その他にも、義概の家集『左京大夫家集』には、江戸から磐城までの道中の地名を詠んだ和歌が確認できる。

松戸の渡りにて

しるしらぬ誰をまつどのわたし守明る日ごと舟よそひして (86才～87才)

江戸の藩邸を出発し「松戸」「小金」「取出(取手)」を通過し、筑波山に至る。筑波山は「筑波嶺」として『万葉集』『古今集』以下に詠まれる歌枕であるが、交通の要衝である「松戸」「小金」「取手」は和歌に詠まれたことはなく、歌枕とはいえない。現在の千葉県松戸の地名は『桜川』にも見られる。江戸～磐城間の地名が詠み込まれるのは、義概の和歌よりも俳諧の句に多い。特に、水戸を通過した後、太平洋沿いを磐城に向かうのだが、その道中の地名を詠んだ句が『桜川』に多く載せられている。

江戸から磐城国までの旅中、彼らは新しい「名所」の発見に努めた。新しく詠まれた「名所」は海岸沿に多い。義概たちに選ばれた「名所」は、和歌に詠まれたことはないものの、景観に優れた場所であったと思われる。これらはもはやこれまでの和歌に見られた「空想の地誌としての歌枕」として詠まれた名所ではない。実際に旅をした人々を感心させた、実体を伴った「名所」なのだと考えられる。

#### (2) 内藤義概の歌人としての評価

宮城県図書館伊達文庫(以下、伊達文庫本)の中に『近代百人一首』がある。『近代百人一首』は、他にも『草花(化)百人一首』(宮城県図書館蔵伊達文庫・国文学資料館蔵)『秀歌百人一首』(ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵)『武家百人一首』に合綴される『新百人一首』(足利義尚撰の『新百人一首』とは別の本)などといった書名で伝わる、紛らわしい諸本の存在がある。伊達文庫本『近代百人一首』は、奥書によると中院通村撰とある。

調査の結果、この『近代百人一首』は江戸初期の武家歌人を多く取り込んだ秀歌撰であることが判明し、内藤義概も歌人の一人として選ばれていた。そこで、『近代百人一首』全文の翻刻を掲載し、編纂者を含めた内容について考察を行い、「宮城県図書館蔵『近代百人一首』の翻刻と考察」として、「いわき明星大学人文学部研究紀要」(第28号、2015年3月)にまとめた。以下、その一部を掲載する。

30 ためしにもかきつたふへき文月のはつかの夜半に初雁の聲

内藤左京亮義概

この和歌は内藤義概のもので、前後して近世初期に活躍した武家歌人の和歌が配列されている。

義概の次の31番に歌が載る歌人は、豊後岡藩第4代藩主中川久恒で、義概とも親交がある武家歌人である。41番に歌が載る歌人は、但馬出石藩第6代藩主小出英安で、室は内藤義概の娘。また、小出英安は義概とともに、天和二年の朝鮮通信使饗応役を務めた。42番に歌が載る歌人は、阿波徳島藩第3代藩主蜂須賀光隆で、中院通茂に師事、飛鳥井雅章と交流した。室は小笠原長勝姉で、小笠原長勝は義概と和歌の贈答を行っている。中院通茂や飛鳥井雅章は、義概の家集の点者でもある。近世初期の歌人の歌を集めた秀歌撰『近代百人一首』に採られていることから、義概は近世初期の武家歌人を代表する人物であることが判明する。そして、他にもこの時代を代表する武家歌人と多く交流を持っていたことも明らかになった。

#### (3) 内藤義概と親交を結んだ武家歌人について

内藤義概の家集には、和歌を好んだ武家歌人との贈答歌が収められている。そこで、本研究の最終年には、17世紀、特に寛文・延宝年間(1661～81年)に活躍した武家歌人の相互交流について調査した。例えば、義概と親交のあった岡藩藩主中川久恒の歌会には、堀田一輝・岡本宗好ら当時を代表する武家歌人が参加していた。宗好の歌会には盛岡藩藩主南部重信が、松岡藩藩主中山信治家の歌会には堀田一輝らが参加していたことが、それぞれの家集の詞書から判明する。

義概の家集に贈答歌が残る中津藩藩主小笠原長勝は、浜松藩藩主青山忠雄と親しく、忠雄亭に出向き頻りに歌会を行っていた。忠雄は父宗俊とともに飛鳥井雅章門で、『雅章御詠』には雅章と宗俊の贈答歌が多く収められている。長勝も雅章の門人で、自身の家集『内匠頭源長勝集』は、寛文5年から延宝7年までの雅章から合点を得た和歌をまとめたものである。雅章は、内藤義概の家集の点者でもあった。

本研究の課題を遂行した結果、近世初期の武家歌人の交流という、次の研究課題を見つけたことができた。今後は、内藤義概を中心とした武家の相互交流と、彼らが残した和歌や俳諧について調査してゆく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

「宮城県図書館蔵『近代百人一首』の翻刻と考察」

いわき明星大学人文学部研究紀要  
査読無、第28号、2015、1-12

「磐城平城主内藤義概の文芸について  
- 「名所」の和歌・俳諧を中心に -」  
いわき明星大学大学院人文学研究科紀要  
査読無、第 12 号、2014、1 - 11

〔学会発表〕(計 1 件)

発表者 松本麻子  
発表題目「17 世紀における武家歌人の相互  
交流」、和歌文学会関東例会  
2015 年 1 月、発表場所 日本大学

## 6 . 研究組織

研究代表者 松本麻子 (MATSUMOTO, Asako)  
いわき明星大学・教養学部地域教養学科・  
准教授 研究者番号 : 70708990